

逗子市における事前復興計画の提案(1)

-原風景から事前復興計画へつなげる観点-

The Proposal of Advance Planning for Disaster Reconstruction in Zushi (1)

-To apply generated perspectives from proto-landscape to advance planning for disaster reconstruction-

正会員 ※○平井政俊 *
正会員 南耀太 **
正会員 児玉千絵 ***
正会員 石塚直登 ****
正会員 ※ 志村真紀 *****

* 平井政俊建築設計事務所, 修士(デザイン学)(※設計指導)
** 横浜国立大学大学院都市イノベーション学府 博士課程前期
*** 東京大学大学院工学系研究科都市工学専攻 博士課程後期, 修士(工学)
**** 横浜国立大学大学院都市イノベーション学府 博士課程後期, 修士(工学)
***** 横浜国立大学地域実践教育研究センター, 准教授, 博士(デザイン学)(※設計指導)

※○HIRAI Masatoshi *

MINAMI Youta **
KODAMA Chie ***
ISHIZUKA Naoto ****
SHIMURA Maki *****

* Masatoshi Hirai Architects Atelier, M. Design.(※Adviser)
** Graduate School of Urban Innovation, Yokohama Nat. Univ.
*** Department of Urban Engineering, School of Engineering, The University of Tokyo M. Eng.
**** Graduate School of Urban Innovation, Yokohama Nat. Univ. M. Eng.
***** Yokohama National University, Global-Local Education Research Center. Associate Professor, Dr. Design (※Adviser)

1. 事前復興計画と原風景

大災害が発生すると、その地域における歴史や文化、人々の記憶が失われてしまい、さらに土地の形質も変わってしまう。また発災後は迅速な復興が求められるため、それら地域の特徴などに配慮した復興計画はほとんど行うことができない。例えば、海が全く見えない程長大な防潮堤が漁村に築かれたり、山の頂部を切り払って集団移転用地とされたりするように、復興の名の下にさらなる風景の改変が行われ、結果的に地域の特徴がより一層喪失されてしまう恐れがある。

これに対して「事前復興計画」とは災害に対して弱い部分を強くしておくことで被害を減らし、また予め復興の考え方や対策を計画しておくことで発災後により早くより良い復興が出来るように事前に準備しておくことである。よって、事前だからこそ、地域の特性を捉え直し、これを活かす復興のあり方を多角的に議論することが可能であり、またそのことが発災後にも地域らしさを持続するために重要であると考えられる。

今回、逗子市の事前復興計画の提案にあたり、逗子市民へのヒアリングを行い、地域住民が大切にしている逗子らしい原風景に繋がられるような復興のあり方が望まれていることが分かった。本稿では、「原風景」とはただ懐かしい風景だけでなく、「地域が根ざしている気候や風土、空間、文化、歴史に関わる人々の意識無意識の個人的、集団的記憶の蓄積¹⁾」として定義し、逗子の原風景を掘り起こすために、写真や風景画、地図などの歴史資料および住民へのヒアリングを通して調査し、事前復興計画へつなげる観点を分析した。

1900(明治33)年



写真1 田越川河口、新宿付近鳥瞰 (長島孝一氏蔵)

1911(明治44)年



写真2 久保木実 「絵葉書が語る三浦半島の百年」 屋敷通り

1 参照・長島孝一「風土と市民とまちづくり」(鹿島出版、2015年 出版予定)

2. 水辺の原風景の調査分析

住民ヒアリングの中で挙げられた最も大切な逗子らしさは「水辺と共生した暮らし」であった。そこで逗子市沿岸部および田越川流域の資料を中心に分析を行った。ここでは資料 19 例のうち特徴的な 4 例を示す。

① 新宿地域・屋敷通りの黒松並木

写真 1 (前頁) は明治期の海岸沿いの新宿地域である。低層低密の日本家屋が多く、黒松が自生する大きな庭に囲まれている。海沿いの屋敷通り (旧浦賀道) からは披露山がよく見える。現在は中層のリゾートマンションが並び、黒松もほんの一部を残すばかりとなってしまった。

写真 2 (前頁) で分かるように、津波から避難の際は披露山など目的地を視認しながら、避難方向を示す黒松並木沿いに屋敷通りを進めば高台である披露山や桜山にたどり着く。また、黒松の落葉掃除という大変な作業を一緒にすることで通り沿いに強い地域コミュニティが形成されていたという側面もヒアリングによって捉えられた。

② 日常的空間としての田越川の役割

写真 3 の田越川は、伊豆と江戸を結ぶ水運に使われていたが、他方、川から入る屋敷があったり (写真 2)、釣り船や洗濯物が写っていたり、現在の排水路という様相よりも日常的に多様に利用されている。日常的に水辺の場面が様々あることが、津波や水害など非日常時への意識を高く維持していたと推察できる。

③ 50 年前と 50 年後の逗子

写真 4 は終戦直後の逗子海岸である。湘南海岸道路開通前で、その分広い海岸と街は分断されていない。この頃の人口と今から 50 年後の人口がほぼ同じになるという推計²がある。高台に住宅地が開発されきった現在から考えると、50 年後はこれよりもっと低密で空疎の多い街に戻り得ると言え、そこは積極的に水辺や緑地として活用することが求められるのではないだろうか。

これら原風景の分析から得られた事前復興へとつなげる「水辺と共生しつづける」ための観点を、次稿以降に示す提案に反映し、住民ワークショップでさらに意見を集めた。

3. まとめ

長い歴史の中で維持されてきた逗子の水辺の原風景を分析してきたが、戦後から高度成長期を経て、それらは時代の要請とともにほとんど漂白されてしまい、原風景と現風景はすではイコールでは無くなってしまった。しかし、50 年後、100 年後の未来に向け、たとえ大きな災害があつてさらに原風景が失われたとしても、事前復興計画として留めておくことが出来れば、新しくつくる街の風景すらも原風景と地続きであり、その地域らしい魅力を持続した復興ができると考える。また、原風景が幾分でも残る今のうちに様々な方法で掘り起こし、またそれらを活かす事前復興計画について住民を交え議論することが強く求められていると考える。

1910 (明治末)年頃

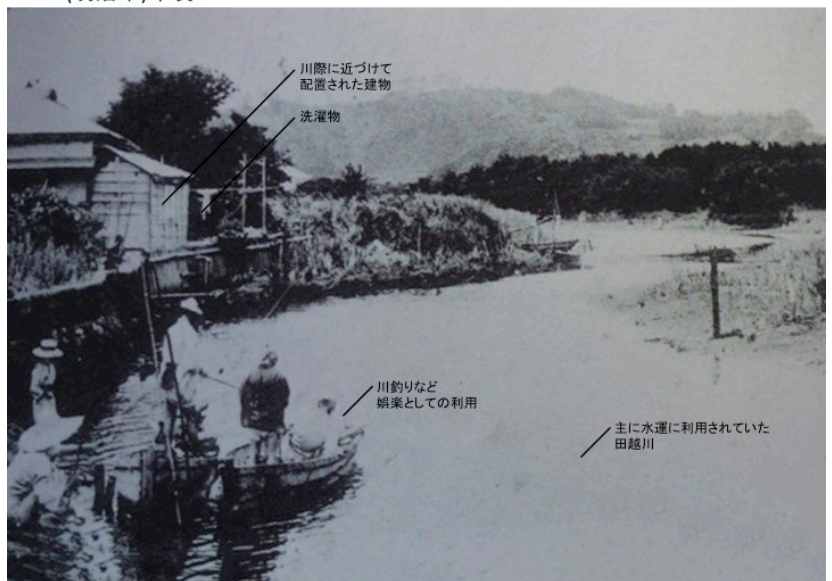


写真 3 久保木実 「絵葉書が語る三浦半島の百年」 田越橋の川釣り

1946 (昭和21)年

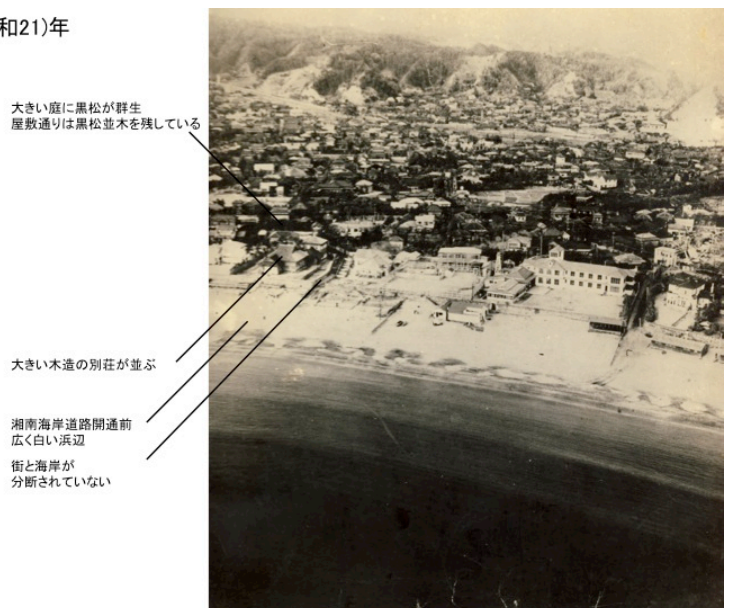


写真 4 戦争直後の逗子海岸 (長島孝一氏蔵)